

年間第 14 主日 (マタイ 11:25-30)

イエスに学ぶ人は安らぎを得る



7月に入りました。二週間前に説教を書いて韓国巡礼に出発しましたが、サッカーで盛り上がっているのでしょうか。あるいは盛り上がりは急にしぼんだのでしょうか。今、説教をしている時点で助任神父様の企画した巡礼を終えて帰ってきているはずですが、説教をするその時には感じたことをちゃんと伝えられると思いますので、ブログ・メルマガ・ホームページを閲覧される方は YouTube 動画が最新情報込みとなります。そちらをご覧ください。

ありがたいことに、霊名のお祝いをさせていただきます。以前にも話したことがあります。皆さんにも洗礼名（霊名）がありますから、それぞれお祝いしてほしいです。私たちが受ける祝いは、「皆さんも何かの形で祝っていただきたい」そのことのしるしだと理解してください。仰々しくなくていいのです。霊名（洗礼名）に感謝する何かを、考えてみてください。

これまで、たくさんお祈りいただきました。お知らせでは繰り返しお祈りのお願いをしてくださっていました。お祝いしていただくことで力をいただいています。しっかりお返ししていきたいです。しかし何をもってお返しできるだろうか、考えてしまいます。

皆さんは、たびたびミサをささげてくださいます。ミサ奉納金をいただくので、お金でお返ししたら良いのでしょうか。それよりは、ミサをささげてくださる方々のために祈りをする事のほうが嬉しいかもしれません。詰まるところ、司祭はいろんなご恩を、祈ることではお返しできないちっぽけな存在です。

そう思いつつ福音朗読を読み返すと、イエスはこう言っておられます。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。」（11・25）司祭は、イエスの祈りのように、「あなたをほめたたえます」という祈りを本来ささげる必要があります。どんな祈りをしていただろうか。いちばん時間のかかる教会の祈りも、どこにいてもスマホひとつで出来る時代になりました。

ただその祈りは、「ほめたたえる」祈りになっていただろうか。

「義務的な祈り」で終わっていなかっただろうか。ミサをささげているときですら、「ほめたたえる」という心がけでいたか疑問が残ります。「義務的」とまでは行かなくても、終了時間を気にしていたり、聖堂の外の音で気を散らしたり、心から「ほめたたえる」祈りになっていなかったかもしれません。

御父は、「幼子のような者」言い換えれば全面的に心を開き、信頼を寄せている人々にみ心をお示しになりました。その方々が司祭を支えてくださり、またこのたびのように霊名の祝いをさせていただきます。どんな祈りでお応えすればよいのでしょうか。祈りの具体例が、朗読の後半なのだと思います。「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負

い、わたしに学びなさい。」（10・29）

イエスはしばしば、一人離れたところで祈ることがありました。朝早くとか、ゲッセマネの園でとか、祈るための場所を用意して祈っていました。「わたしの軛を負い」とは、このことかもしれません。一人、祈る。もちろん、イエスとともに軛を負いつつ、一人で祈る。この時間が、皆さんの支えに応えるまことの祈りの時間かもしれません。もちろん、イエスは公の場でも祈っています。公の祈りにも、より一層、イエスとともに軛を負いつつ祈る心が求められるでしょう。

もう一つ、イエスは失われた羊のところに出处けていく方でした。私も、失われた羊のところに出处け、その人の軛を担う。それは手を合わせて祈ることではないけれども、今もイエスが「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。」と言われたことを今この時代に証明するお手伝いが必要になります。今も「わたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と仰っている。それを告げ知らせることが、皆さんの支え・力に応える方法となるでしょう。

ただ、教会の信者さんと合う場所は教会だけとは限りません。教会のある信者さんたちはそれぞれの働いている場所でしか会えないことがあります。中田神父はなかなかそういう場所には行きませんが、一度だけ、そこでしか会えない信者さんとの出会い、しばらく話をしたことがあります。それは防波堤でした。この人は明らかにとある教会の信者さんで、兄弟は確実に教会に来ているのに、この人だけが教会には寄り付かず、波止場でしか会えないのです。

当時私はクロダイ釣りやイカ釣りのために波止場に行くことがありました。最初は話すこともなかったのですが、しょっちゅうその人と会うので、「よく会いますね」と声をかけたのです。「あー、神父さんでしょ。知ってますよ。兄貴がお世話になってます。」そう言うのです。「信者なら教会に来い」といきなり叱りつける勇気はなかったので、「あー、〇〇さんの兄弟ですか。」と返事をしました。その後も私が頻繁に波止場で声をかけたので、その人にとっては何かの働きかけになったと思います。今、その人が教会に足が向くようになっていれば幸いです。

失われた羊は、もちろん波止場にだけいるわけではありません。飲み屋さんにもいるでしょう。もっと入りにくい場所にもいるかもしれません。私はちょっと入れませんが、その人たちのことも思い出し、想像を膨らませながら、囲いの外にいる羊たちにも心をかけているイエスが、今この時代にもいることを、残りの時間で告げ知らせていきたいと思います。

私に残されているのはせいぜい 15 年か、20 年です。その間にあと何人かでも出会って、囲いに連れて帰り、「ご覧ください。あなたの一タラントで、これだけ儲けました」と、最後に報告できる人生でありたいと思います。